



## ティー・ブレイク

NO. 95

### 座敷童子（その2）

座敷童子（ざしきわらし）というのは、その名のごとく、子供の妖怪である。東北地方の古い屋敷に生息し、言い伝えによれば、それが居る家は繁栄するという。

金田一温泉（東北新幹線の二戸の駅から降りて、車で15分ほどのところにある）で、旅館の名前は「緑風荘」、「それ」が出るという部屋は「エンジの間」である（注：「エンジ」は何か当て字のような難しい漢字）。

この旅館の大広間（食堂として使われている）でも、適当に写真を撮ると（デジカメでもOK）、写真に白い玉のようなものが写ることがある。また、実際に「エンジの間」で写真を撮ると、3枚に1枚くらいはそれが写る。そして、運が良ければ、夜に座敷童子を見ることができるという。

そして夜。座敷童子に会うためには、北枕で寝なければならない。というわけで、北枕にして寝ると、10月だというのに、かなり寒い。この隙間風の場合は、いつのころの感覚だったろうか。かなり前だったような、それでいてそうでないような、でもとても懐かしい感覚である。

隙間風があるのに心地良い、というのは、とても妙な感覚であるが、そんなことはどうでもよいと思いかけ、少しまどろんで、眠りについた。

目を覚ましたのは、重苦しい感じがしたのと同時に、笛の音のようなものが聞こえたからである。いったい何時になるのだろうか。普段よりもかなり早く床に着いたために、時間の感覚がつかめない。時計は2時を指していた。普段であれば、まだ仕事をしている時間である。

遠くのほうで幼い子供の何人かがはしゃぎながら走る音と声が聞こえる。

それから暫く寝付けないでいると、枕元に人の気配がする。「何かが、居る」そうして不意に目をやると、白い顔をした子供がこちらを見ている。表情は、ちょっと硬いような、それでいて微笑んでいるような、そんな感じである。

「果たして、あれが座敷童子だったのか。それとも夢であったのか」、起床したときの感覚は、そんなものである。今回お誘いをいただいた方に一連のことを話すと、「ああ、それは良かったね。で、付け加えると、こんな田舎で、草木も眠る丑三つ時に走り回っている子供なんて、居ないよ」と言われた。

「あれもそうだったのか」とも思ったが、午前2時が深夜とっていない今の自分のおかしさにも気付く。あれが全て演出であるとしたら、それはそれで大したものであるが、こういったもてなし方もあるのかと、つくづく感心もしたのであった。 (正)